

恐れと畏れ

菅原伸郎

南無
善財

昨年の夏、大雪山系の石狩岳に登ったときのことだ。中腹にあるブヨ沼のテント場は私一人だけで、はやばやと眠りについた。

夜中に目が覚めると、天幕の周りを何かがうろついている。足音からして大型の動物らしい。しばらく寝袋の中でじっとしていたが、少し遠ざかった感じがしたので、いきなり携帯ラジオと笛を鳴らし、懐中電灯をつけた。ドドツと逃げていく相手を確認は出来なかったが、下山後に地元の人に尋ねると、その時間ならヒグマです、といわれた。

襲われていたら、新聞に「中高年

の無謀登山」と書かれただろう。弁解の余地はないが、そのときはとくに「恐ろしい」とも感じなかった。どう行動すべきか、ひたすら考えていたからだ。岩壁を登っているときは、集中していて何も考えていないのと同じである。

幼児のころは雷鳴にびくついたけれど、その後はあまり恐怖の記憶がない。胆力の有無などよりも、雷鳴は放電現象である、といったことを学校で教わってきたからだろう。ヒグマの生息地に入ってテントを張っ

た以上、先方が夜回りにやってきても仕方がないのである。

科学が未発達だったころ、人々は猛威をふるうもの、不可解な幻影におびえていた。地震、日食、伝染病、夢など、説明のつかないことが多すぎた。結果として、アイヌ人がヒグマを「カムイ」（神）と崇めたように、日常生活での「恐れ」は超越的存在への「畏れ」に転化し、オニともカミとも呼ばれていく。ユダヤ教やヒンドゥーや神社神道、そして多くの原始宗教はそんな形で育ったのだ。だから、いまも「主を畏れよ」「畏み、畏み」などと祈っている。現代に生きる私も、ヒグマは恐ろしい。かみつかれたらさぞ痛いだろうし、死ぬかもしれない。しかし、

それはそれだけのことである。凶暴な肉食獣ではあっても、決して「山の神」などではない。もう「雷神」を崇める人もいないはずだ。

そうした畏怖感情を早くから乗り越えた先人もいた。イエスもその一人だろうが、何といっても釈尊とそれの流れた。仏典には「無畏」、つまり「畏れ無し」「畏れるな」という言葉がよく登場する。

たとえば、観音経には《観世音菩薩摩訶薩は怖畏急難の中に於て、能く無畏を施す。是の故にこの娑婆世界に皆之を号して施無畏者とす》とある。「施無畏者」は観音さまの別名だ。親鸞も「教行信証・真仏土巻」で「浄土」の異名として《また灯明と名づく、また彼岸と名づく、

また無畏と名づく》と記している。

文部科学省の学習指導要領は、道徳の授業で「畏敬の念」を教えるように求めてきた。「畏れ」を宗教の本質と考えているらしい。哲学者のI・カントも《私の上なる星をちりばめた空》（実践理性批判）を眺めて「畏敬の念」を抱いたらしいが、神学者のF・シュライエルマツハーは『宗教論』（高橋英夫訳、筑摩書房）で厳しく批判している。

《物体の世界の美しさには喜びを

覚えるが、こういう怖れや喜びが、きみたちにはじめて世界の直観、世界の精神の直観を与えてくれた、ということであってはならないのだ。（中略）それらの感覚自体は別に宗教でもなんでもない》

前号で書いたように、教育基本法の「改正」が迫っている。条文をいじると、宗教的情操教育が進むかのように説く政治家もいる。しかし、その場合、宗教をどんな風に教えたいのだろう。前述のように、ヒゲマヤ天体への「畏れ」を前提とした宗教と、仏教とでは大違いなのだ。国会では、そうしたこともじっくり議論してほしいものである。

（すがわら・のぶお／

東京医療保健大学教授）

